

LIGHT OF LOVE

Overseas Project for the Blind – Plans and Reports

No. 12 1997. 7

愛の光通信

東京ヘレン・ケラー協会 海外盲人援護事業事務局



娘の手引きで歩行訓練をする盲婦人
ネパール・バラ郡で

ネパール王国の 盲人職業開拓と法制化について

海外援護担当理事 井口 淳

昨年発行の「愛の光通信」（第11号）にネパール王国における盲人の職業開拓について、私見を述べたが、まだ充分に理解していただくところまでは書いていなかったように思う。

私が懸念していることのひとつに、あんま・マッサージ業が何故現地で嫌われ、正業と思われないのかということがある。東南アジアの国々でも同じことが言える。わが国では古くから「あんま・マッサージ師＝盲人」と考えられ、盲人の職業の保護政策がとられていたので誰も嫌う人はなかった。ところが東南アジアでは、マッサージが風俗営業に結びついており、「マッサージ」という言葉自体に対する偏見がある。ところが、鍼灸となると俄然印象が変わってくる。

「国際視覚障害者援護協会」が、アジアの盲人を日本に招き、盲学校に入学させて、「あんま・鍼灸」を習得させるという事業をおこなっている。留学生は、技術を習得し一定のカリキュラムを終えてそれぞれの国に帰国しているが、ネパール人留学生の場合などは、医療制度の壁に阻まれて、日本で習得した技術を発揮できないでいるケースもある。また、選抜されて日本に来ることができるような優れた盲人はよいとしても、そこまで到達しない人々の職業はどうすればよいのか。鍼灸の技術を盲人全員に習得させることが最もよい方法だが、日本での鍼灸師の免許取得はなかなか難しいのが現状である。

そこで、医療マッサージ師という名目を使用して、日本の「あんま・マッサージ師」のような職業を普及してはどうかと考える。そのためには、まず第一に、ネパール王国の医療法規の整備を急ぐ必要がある。わが国と同じように「あんま・マッサージ・指圧師、鍼師、灸師」という法律の確保である。第二に、各病院では医療マッサージ師を必ずおかなければならないということを法律で義務づけるとともに、身分制度の安定を図ることも



前駐ネパール吉田大使と懇談する井口理事

考えなくてはならない。このことは、ネパール王国の国立病院を見学した際にも感じた。腕が折れた人が、いつまでも首から布をさげ腕を吊ったまままでいるため、治っても腕がなかなか伸びず固定してしまい、日常生活に不自由を強いられている人が多いのである。わが国ではそんなふうに腕を曲げたまま歩いている人を見かけたことがない。わが国の病院ではこうした場合、理学療法という治療法があって、専門家が筋肉をやわらげて腕の伸縮をおこない、元どおりの日常生活ができるまで訓練するのが普通である。しかし、ネパールではリハビリの治療法も確立しておらず、その専門家もいない。こうした医療現場が、この国の人々の日常生活をさらに不自由にしているのではないかと思われる。こうしたことが普及するまでにはかなりの時間がかかるかもしれないが、法律を整備することによって医療制度の改革がなされ、マッサージ師の必要性が求められるようになると思う。

マッサージ師に比較すると、鍼灸師の場合は、中国の影響もあって、比較的ネパールの医療のなかで好意的に受け止められている。だが、ここで問題になるのは、盲人に鍼灸が出来るかどうかなどの疑問を持つ人々がまだまだいることだ。こうしたことを考慮した場合、わが国の盲学校や国立視力障害センターに鍼灸・マッサージ科があるよ

に、ネパールに視覚障害者専門の鍼灸マッサージ学校を設立することが、ネパールの盲人職業開発にとって最良と思われる。このことは盲人の職業開発のみならず、ひいてはネパール王国の医療水準を引き上げることにもなるのである。この事業を成し遂げることも私に課せられた使命だと思っている。

話は変わるが、当協会は8年にわたり、ネパールの農村地域において視覚障害者のC B Rをおこなってきた。村を巡回し、盲人に在宅訓練を施しているフィールドワーカーの話によると、村々にはビタミンA不足が原因で失明する子どもたちが数多くいるという。失明することがわかっていながら放置するわけにいけないので、こうした子どもたちに対し、定期的にビタミンA剤を配布している。この配布活動によって、多くの子どもたちが失明から免れるている。このように当協会の現地フィールドワーカーたちは、盲人の自立促進だけでなく、失明に至る前の児童をも発見し失明防止に努めている。こうしたNGOの先行的な活動がネパール政府を刺激したのか、最近では国家ビタミンA配布プログラムとして、ビタミンA不足の児童に対し、政府が無料でビタミンA剤を配布するようになったということである。これも大きな進歩だといえる。

当協会がネパール援護事業を始めて十数年を経たが、始めた頃は4校しかなかった視覚障害児教育校も、今では26校に増え、500人近い盲児が就学できるようになった。フィールドワーカーの話では、盲児を見だし、親に就学を促すと、決まって「盲児に学問をさせて何になるのだ」といった返事が返ってくるそうだ。学校に行くこと



バラ郡カレーヤ町での試験的鍼灸治療



バラ郡カレーヤ町での試験的鍼灸治療

の必要性を説得するのに苦労したという、笑うに笑えない話も残っている。

ともかくも、ネパールの盲教育をわが国と同じような教育水準にまで引き上げるために、もう一息頑張りたいと思っている。最初に始めた点字教科書印刷所も順調に稼働しているとの現地からの報告もあり、嬉しい限りである。

今後の私の目標は、雄大な国土を持つモンゴルで盲人の学校教育、職業教育のために、少しでもお手伝いできたらと思っている。日本人とモンゴル人は両国民しか持たない同じ遺伝子を持っているとのことであり、日本人の祖先であるモンゴルで、盲人教育に命を燃やすことが私の残された使命と考えるからである。皆様の心あるご後援をお願いいたします。（日本人とモンゴル人の遺伝子に関しては、東京外国語大学講師・金岡秀郎氏の著書によるものである。）

事務局は、1995年11月ネパールに専門家を派遣し、視覚障害者の職域拡大に関する調査を実施した。その際、当協会のC B R実施地域であるバラ郡で、25名の適応患者に対し鍼灸治療を試みたが、鍼灸に対する患者の反応は極めてよく、また地域医療としての可能性も実感できた。その後の情報では、カトマンズの国立ビル病院、カトマンドゥモデルホスピタルで、中国で学んだ鍼灸師が医師の下で鍼灸治療を施しているという。鍼灸・マッサージの普及はこれからである。

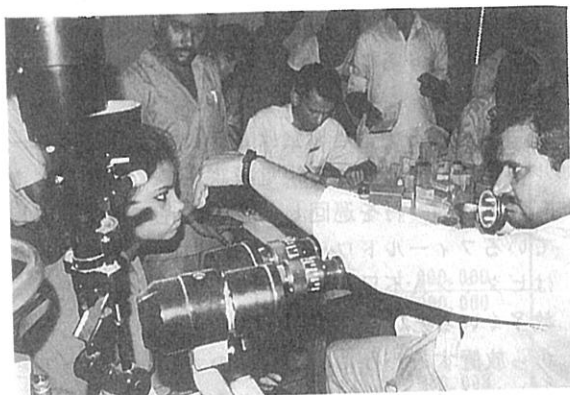
農村地域での失明予防

複合的な失明原因

私たちは、ナラヤニ県バラ郡において、視覚障害者のC B Rを8年にわたり実施してきました。そして、その一環として、1992年3月から眼科診療所を中心に失明予防活動に全力で取り組んでいます。

バラ郡は、インド国境に沿って帯状に広がるタライ平野に位置した農村地帯。105の村に約40万人が住み、ほとんどが農業を営んでいます。4月・5月は40度を越す猛暑で、雨期には激しい雨がしばしば洪水を引き起こし、衛生状態は極度に悪化します。そして病気を蔓延らせることになります。

また、この地はネパールの中でも、栄養障害を原因とする白内障や眼球乾燥症、トラコーマ、外傷性の眼疾などによる失明が多いところとして知られています。こうした症状のほとんどは、初期治療によって治癒するものばかりですが、村人のほとんどは初期症状に対する知識がないため放置状態が続き、重篤な症状に陥ってはじめて病院を訪れます。しかし、その時はすでに手遅れとなっている場合が多いのです。さらに、ネパールでは眼科医や病院が絶対的に不足している上、医療施設は都市部に集中しています。こうした僻地では、貧しくて治療費が捻出できないばかりでなく、移動や滞在にもお金がかかるため、初期症状が発見されても気軽に病院に行くことができません。一方、失明原因をさらに溯れば、ネパールの単調な



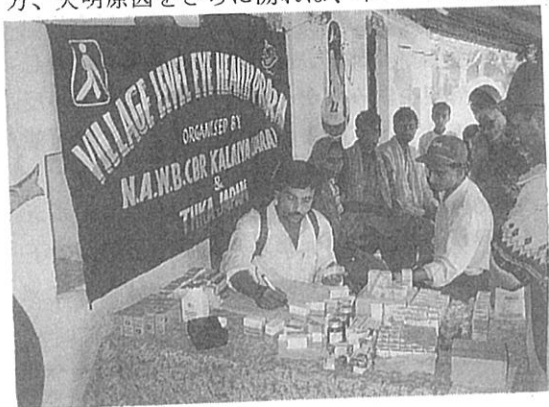
眼科診療—バラ眼科診療所で

栄養価のない食生活に思い至ります。AOCA（アジア眼科医療協力会）の派遣で、眼科病院を拠点に長期にわたって現地に滞在し、アイ・キャンプ（野外開眼手術）を中心に眼科医療に従事したことがある飽浦医師は、「ビルガンジ通信」（風来舎・刊）のなかで、「とくにビタミンA欠乏症は、幼い子どもに重篤にあらわれ、失明、時には命まで奪う。……ネパールの食事は単調である。米のめしと豆の汁、野菜カレー（入っているのはほとんどジャガイモのみ）である。米にも豆にもジャガイモにもビタミンAは含まれていない。ビタミンA欠乏状態の子どもが下痢をおこす疾患に罹患すればてきめんである。ビタミンAその他の栄養素は完全に体から失われてしまい、角膜軟化症→感染→失明、全身の抵抗力低下→感染等→死亡への道が待っている。」と書いています。

事実、私たちも、村で出会う子どもたちの眼に異常を発見することしばしばです。また、時として角膜が溶解し眼球が飛び出している障害児に出会うこともあり、その実態に驚愕することがあります。

バラ眼科診療所の成果

バラ眼科診療所には眼科医は常駐していません。ビルガンジの眼科病院から、月2回眼科医と眼科助手（シニアOA）を派遣してもらい診療に当たっています。これ以外の日は、カトマンズの病院



村単位の巡回眼科診療

研修を受け、眼科助手（ジュニアOA）の資格を取ったCBRスタッフ3名が毎日診療に当たっています。患者は年々増加しており、昨年1年間の総患者数は8,229人。症状別では、結膜炎2,977人、白内障1,368人、眼球乾燥症57人、トラコーマ41人、緑内障11人、その他となっています。総患者数に対する結膜炎患者の比率から明らかなように、重篤にならないければ病院に行かなかった患者が、気軽に診察を受けている状況が推察できます。もちろん、無料であることが最大の要因ですが、診療所が農村地域の真ん中にあり、移動に負担がかからないこと、CBRス

タッフがフィールドワーク時に患者を発見し受診を促すことなどが受診環境を作っている要因でもあります。加えて、バラ眼科診療所は、定期的に失明防止講習会、巡回学校検診、巡回村落検診をおこなっており、こうした初歩的眼科知識の普及がこの背景にあることも見逃せません。

この地域において、貧困からの脱却は大変困難なことですが、わずかでも原因を除去することができれば、少なくとも病気を軽くすることはできますし、失明を免れることも可能です。私たちは、初期眼科医療に失明予防の大きな可能性を見いだして活動を続けています。

雑誌を売る盲人

5月のタライ平野の太陽は灼熱。ゆうに40度越えている。飲み慣れていないコーラも、ここでは水みたいなもの。インド国境に近いこの村はバグワンプル。私たちはここに住む36歳の盲人、ヤダブ氏を訪ねた。

仕事は雑誌売りである。

ネパール人はインド文化に憧れている。映画などは、ネパール人にとって唯一最高の娯楽で、上映作品のほとんどがインド製。そして若者の口ずさむ音楽も決まってこのインド映画音楽。雑誌もしかし。しかし、こんな田舎に雑誌など求むべくない。ここに目をつけたのがヤダブ氏である。

この辺りは国境に沿ってインドの車が走る。村から駅までは6キロ。彼はこの道のりを家族の手を借りながら、時にはバスを使い、時には歩く。そして一人で汽車に乗り、国境の町ラクソールへ。インド・ネパールはフリーボーダーなので、ネパール人もインド人も往来は自由だ。確かにこの辺りでは、ネパール人もインド人も区別がつかない。ラクソールではインドの友人が待っていて、彼の手を借りて雑誌を仕入れるという仕組み。娯楽もなく、外の情報が極めて少ない農村の若者やインテリにとって、こうしたインドの文化情報はこの上ない貴重なものである。彼は、この仕事で年間1万ルピー（約2万2千円）を稼ぐ。この辺りの農家の年間収入がざっと1万5千〜2万ルピーであるから、一人で生み出す収入としては結構な額ある。



10歳のとき結膜炎を悪化させ、これがもとで失明。同時期にポリオに罹り、右足にその痕跡を残している。二十の頃インドの友人に誘われてこの仕事を始めたという。もう16年になる。6人家族で、妻や他の家族は農業を営んでいる。一年前にバラCBRの訓練を受け、いまは家族とともに水牛飼育もしているが、この魅力ある仕事は、彼に活力の源を与えているようだ。

バラ郡のフィールドを歩くと、時としてこうしたたたかひでバイタリティ溢れる盲人に出会うことがある。そして決まって、こうした盲人がいる村は活気にあふれており、村人たちの盲人に向ける目も温かい。

暑さで朦朧とし、ほとんどネパール化している私に、清涼剤の如き清々しさを与える人たちである。

盲児童から手紙が届きました

今、ネパールの教育は過熱状態で、その異常さに驚愕するばかりです。たとえば、首都カトマンズでは、中流家庭以上の子どもは、私立の学校に通うのが普通になっています。私立校では、外国人教師を揃え小学1年から英語教育をおこなうなど、教育環境や教師のレベルで公立校とは歴然とした差があります。ネパールでは高校卒業時に、SLC（高校卒業認定試験）があり、これにパスすれば、大学に進学する資格が与えられ、初等教育の教師や公務員への道も開けます。SLCは、いわばネパール社会のステータスを得るための最初の関門です。このSLC合格率、公立校の20%に対し私立校が80%という訳ですから、私立校への執着も致し方ないのでしょう。ところで、この5月にインド国境沿いの公立高校を訪問したおり、たまたま9年生の授業を見学したのですが、ここでは、数学をすべて英語で教えていました。SLCを巡るネパールの教育熱は公立校へも及んでいるようです。

一方で、依然として初等教育さえ受けられないたくさん子どもたちがいるわけで、教育格差は広がる一方です。こうした状況の下、私たちはネパール盲人福祉協会と共同で、地方の5つの寄宿制統合教育校、3つの通学制統合教育校を開設し、82名の盲児童を支援しています。彼らは、熱に浮かされた教育とは無縁です。校長をはじめとするスタッフの熱意や理解に支えられ、地域コミュニティの協力をも得ながら、ハンディを克服して健やかに成長しています。そして、会うたびに、ひとまわり豊かになったとびきりの笑顔を私たちに見せてくれます。彼らからうれしい手紙が届きましたので、ここに紹介します。原文はネパール語の点字です。

● ルバンディヒ郡シャンティ校7年

Prem Kumari Dusad

視覚障害者として生まれた私たちは、これまで全く光を閉ざされた世界に住んでいました。しかし、ネパール盲人福祉協会と日本の東京ヘレン・ケラー協会の方々の努力によって、心の目を開くことのできる機会を得ました。もし東京ヘレン・ケラー協会の援助がなければ、この学校で勉強することはできなかったでしょう。私たちは、教育という光りを授かることなく、暗闇の片隅に追いやられたままだったでしょう。今後のネパール盲人福祉協会と東京ヘレン・ケラー協会の事業の発

展をお祈りします。さらにもっと多くのネパールの人々にこの2つの協会の活動を知ってほしいと思います。これからも、東京ヘレン・ケラー協会とネパール盲人福祉協会、さらに私たちの学校がもっと協力し合い、盲教育を発展させていくことを望んでいます。

東京ヘレン・ケラー協会、ネパール盲人福祉協会の皆様、本当にありがとうございます。

● ルバンディヒ郡シャンティ校7年

Kunti Paudel

ネパール盲人福祉協会を通して、ネパールの盲人福祉に尽力されている日本の東京ヘレン・ケラー協会の方々に感謝申し上げます。東京ヘレン・ケラー協会の援助がなければ、私たちは学校で勉強することはできなかったでしょう。今、私たちは、将来自分たちの手で人生を切り開くために必要な教育の機会を得ました。東京ヘレン・ケラー協会の援助を無駄にしないよう、希望に満ちた未来に向かって努力していくつもりです。私たちはこれからも東京ヘレン・ケラー協会が、ネパールの視覚障害児教育への援助を続けてくださることを願っています。

本当にいつも援助ありがとうございます。



晴眼児と一緒に学ぶマリさんとカンティさん

ルパンディヒ郡もバラ郡も、インド国境に沿って帯状に広がるトライ平野に位置しています。いずれも典型的な農村地帯です。トライ地方は、カトマンズなど高地と違って1年中暑く、特に4・5月から雨期は40度を越す猛暑と激しい雨に襲われます。

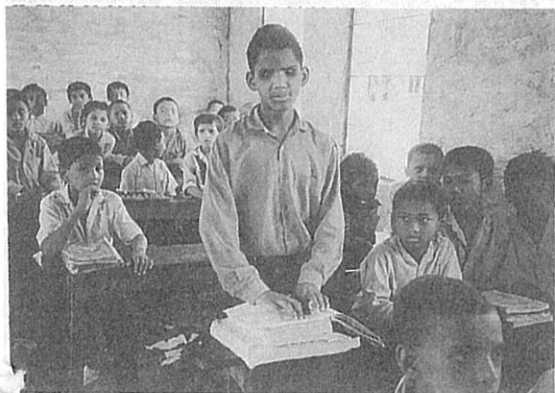
シャンティ校は、釈迦生誕の地で有名なルンビニの近くにあります。手紙をくれたシャンティ校の2人の盲児は、共に17歳の女子です。シャンティ校は盲児のための寄宿舎（といっても空き教室にベッドを持ち込んでの生活ですが）を備えていますが、2人とも学校から歩いて1時間くらいのところに家があるため、寄宿舎には入らず通学しています。彼女たちが入学した時は寄宿舎がありませんでした。仮の寄宿舎とはいえ、後輩たちの寄宿生活がうらやましいようです。苛酷な自然環境と障害をものともしないで勉学に励む姿をカトマンズの人たちにも知ってもらいたいものだと思います。

バラ郡ドゥマルワナ校4年

Krishna Prasad Timilsena

統合教育によって、私たち盲児は勉強できるようになりました。私は将来、大学・大学院で勉強したいと思っています。卒業後、私は教師かエンジニアになりたいです。現在の学校で勉強するまで、私ができることは何一つありませんでした。でも今は、読み書きができます。将来私たち盲人が自立していくために、職業教育と盲人教育の科目を学校に作ってほしいと思います。

最後に、読み書きができる機会を与えてくださいましたネパール盲人福祉協会と東京ヘレン・ケラー協会の皆様に感謝申し上げます。



点字教科書を朗読するクリシュナ・ティミルスナ君



点字教科書を読むクリシュナ・マハト君

バラ郡ドゥマルワナ校4年

Krishna Prasad Mahato

私たちは、統合教育によって一般の生徒と一緒に勉強することができます。ですから、統合教育は、普通の生徒と同じ様に勉強したいと思っている私たち盲児にとって、本当にありがたい制度です。現在の学校に通うまで、私は勉強をしたことがありませんでした。勉強ができる今の私は、とても幸せです。

私は、将来大学で勉強したいと思っています。卒業後は、医者か音楽の先生になりたいと思っています。でもどのように勉強したら、医者や音楽の先生になれるのかはよく分かりません。もし職業教育の専門の先生が学校にいれば、私たちは適切な指導を受けられるのではないのでしょうか。

ネパール盲人福祉協会と日本の東京ヘレン・ケラー協会の皆様、私たちの教育ならびに課外活動をいつも援助していただきありがとうございます。

バラ郡ドゥマルワナ校4年

Ramayan Prasad Yadav

統合教育は、私たち盲児を新しい世界へと導いてくれる大切な教育制度です。将来私は、大学で勉強したいと思っています。その後、音楽家か医者になりたいです。私の夢を叶えるためにも、職業教育の科目と統合教育担当の先生の数を増やしてほしいと思います。最後にネパールの盲教育をずっと支えてくださっているネパール盲人福祉協会と東京ヘレン・ケラー協会の皆様に感謝申し上げます。

ネパール養蚕事情

人から土から生まれるネパールシルク

菅原 温子

現在日本の養蚕業は低落の一途をたどっている。データでみても、日本の1975年の生糸の生産高は世界の40%であったが、1994年では4.1%になっている。これにはもろもろの要素が含まれているだろうが、やがて日本の養蚕業が減びてしまうことを予測させる。こんな中であって、「今にも絶えそうな優れた日本の養蚕技術をネパールに伝えよう」と決意し、全力を注ぎ込んでいる日本人がいる。岐阜県出身、国際蚕糸専門家グループの都竹勝（つづく まさる）さんである。

私がカトマンドウでブラブラしていた2年前のこと。そのころカトマンドウでは定期的な停電があり、私はあるペンションの庭でぼんやりと迫りくる夕暮れを眺めていた。この時が都竹さんとの初めての出会いであった。電気がつくまでの約2時間余り、彼はシルクについて実によくしゃべりまくった。私はといえば、蚕など触ったこともなく、桑の木もまともに見たこともない。しかし、その2時間ばかりのレクチャーによってシルクの虜になってしまったのだから、彼のシルクにける情熱がいかに激しかったかわかりいただけるだろう。

都竹さんは桑畑と水田に囲まれた、代々蚕の種作りをしている家で育ち、大学卒業後は、岐阜県庁で一貫して養蚕にかかわってきた。その技術を買われ、一昨年暮れよりJICA（国際協力事業団）のコンサルタントとしてネパール入りした。その都竹さんの精力的な活躍ぶりをほんの一端であるが知ってもらいたいと思う。

都竹さんはまずネパール各地を実態調査した。その結果、ネパールの養蚕農家は全国で約2500戸、いずれも兼業で生産量は低く副業にもならない程度の規模であることがわかった。しかし、海拔1500m前後の山間地帯は日本と同じ温帯で、しかも雨期を除けば乾燥しているという立地条件は「日本より養蚕に適している」と確信した。

「日本はかつて1世紀をかけて養蚕振興と生糸輸

出で国造りをした。ネパールの気候は養蚕に最適であるから日本の技術指導により、ネパールにも国造りの新しい産業ができる」と、将来性についても関係部門に希望をもたせた。観光以外にこれといって産業のないネパールで、養蚕業は環境破壊することなく、また100%人の力を利用できる産業であると考えられる。

ネパールの養蚕は始まってから20年と日が浅く、日本の養蚕技術と比較すると50年以上遅れている。例えば、桑の植えつけは堆肥も入れず簡単に植えつけ、1年目から1枚1枚葉っぱを摘取る非能率的なやり方である。蚕の飼い方も50年前の日本のやり方で、自然温度で飼育し、桑の伸び方に従って年4、5回飼っているが、回を重ねるごとに病気が多発して、生産は不安定であった。調査を重ねた結果、都竹さんはネパールの国土に適合した日本の養蚕技術を取り入れ、次の4点に重点をおいた指導を行ったのである。

- 1) 消毒技術の徹底。蚕が病気になるために室内、器具の清掃。乾燥、消毒による病原菌の防除。
- 2) 良質の桑苗の育成。ネパール特有の段々畑畑を利用した桑畑の造成方法。桑の木を中間で切り、葉のついた枝ごと蚕に与える能率的な新しい技術（中間伐採という）。
- 3) 藁や竹など自家用材料を利用して費用のか



コバシ本場で指導する都竹さん

からない蚕棚（昔日本で行っていた平飼棚で、ネパール語でなく日本語で「ヒラガイダナ」と教える）や、蚕が繭を作るための道具（マブシ）などの作り方および使い方。

- 4) 日本から持参した蚕種を育て、原蚕を飼育して系統を保存する原蚕製造の基本技術。

現在の日本では養蚕業は分業化していて、種を育てることから道具作りまで全般にわたっての知識をもっている人は少ない。都竹さんのように今までの経験を生かして、昔日本で使っていた器具類を持ち込み、みずから道具作りや溝掘りまでやってみせた情熱と意気込みは、ネパールの農民たちの心を動かし、やる気をおこさせた。「今のネパールではあえて近代化、機械化する必要はない。これだけの労働力と時間があるのだから、手づくり産業でいきたい。」というのが彼の考えである。

またネパール政府にも強力に働きかけ、担当大臣である農業大臣に将来性ある産業であることを助言している。これによりネパール政府は特別予算を計上し、養蚕振興に本腰を入れはじめていているという。

ネパール各地で生産される繭はカトマンドウ近郊のコバシ本場に集められる。私は都竹さんの案内で何度かコバシを訪れた。本場はのどかな農村の中、緑の葉が輝いている桑畑に囲まれた一角にある。ここは試験所にもなっていて、桑・蚕・繭の育て方、飼い方などの研究および各地から集まる養蚕農家のトレーニング施設にもなっている。彼らはここで新しい技術を学び、それぞれの地区に戻って指導するのである。またここでは繭から糸を引いたり、紡いだりする作業も行われている。この作業は女性たちが手仕事でやっているの、紡ぎ糸など、なかなか味のあるものができていた。

養蚕作業は、どちらかといえば軽い作業であるから女性に向いている。かつての日本も、女たちの手で蚕を飼ったものである。技術を継ぐのは女性たちだと都竹さんは考えた。蚕室の広さは8畳程度あれば充分で、蚕が繭になるまでの期間は3週間余りだから、農家の1室を使えば女性でも蚕を世話することができる。繭はすべて政府が現金引換で買い上げてくれるので、蚕種の改良や消毒の徹底などに成功すれば、年約1万ルピー（2万円）の現金収入になる。農家において現金収入は非常に貴重なもので、子供たちの学費にもなり進

学率も上がるというわけである。

養蚕は女性たちにできる比較的安全な仕事なのだから、障害者、目の見えない人たちにも可能性はある、と都竹さんは言う。もちろん補助的な役目だが、固定した場所で桑の枝を並べたり、蚕をまいたりする仕事（蚕は桑を食べるときものすごい音をたてる、また蚕は手でさわって育ち具合をみる）、あるいは蚕棚、マブシなど器具類の製作、例えば縄をなうとか竹を編むとかの工程など、家族とともにやれる仕事はいくつかあるはずである。

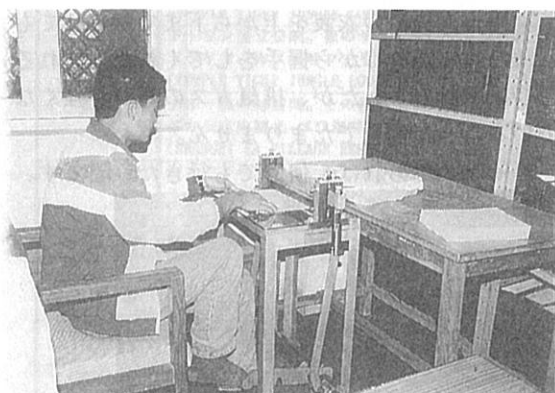
ネパールの生糸生産高は現在年に約1000Kg、ほとんどをインドに輸出している。高品質の生糸ができれば製品化し、「ネパールシルク」として世界のブランドとするのが30年先に描く都竹さんの夢である。絹は高級品というイメージを払拭して、伝統的な日本の着物、ネパールのサリーを実用的なシルクで装えたらと思う。

「長生きしてくださいよ。あと30年…」と言う都竹さんの陽にやけた真っ黒な笑顔からエネルギーがほとばしり、私の夢もかきたてるのである。

（財）海事国際協力センターの輸送費助成で ネパールに「紙折り機」を寄贈

事務局は、（財）海事国際協力センター「国際平和輸送サービス支援」事業の助成を受けて、1996年8月13日、「印刷用紙折り機」をNAWB点字出版所に空輸しました。この機械は、カトリック点字図書館から寄贈されたもので、盲児のための点字教科書製作に力を発揮しています。

（財）海事国際協力センター様および（社福）カトリック点字図書館様に厚くお礼申し上げます。



寄贈した紙折り機

ナマステの橋ーネパ

日本とネパールの首

素朴で人懐っこくて情熱的な
ネパール人が大好き

竹田 功

国境の橋の上に佇んでいると、小さな馬が荷物を背負ってパカパカと国境を行ったり来たり。照りつける太陽。砂ぼこりの匂い。その夜、マハラジャの城で招待してくれた夕食はすばらしかった。マンゴージュースを片手に屋上を散歩していると、下の草むらから日本だったらコオロギのような虫の鳴き声。空からはまーいお月さま。夢のような一時を過ごさせてもらった。(私事で恐縮ですが、けれどもここで誕生日のお祝いをしていただきました。)

翌日は盲人家庭の訪問。みんな一生懸命生きてる姿が手にとるようにわかった。その夜は長い入り日をバスで拝んで、舟で川を渡りジープでジャングルの中へ。うとうとしていると遠くで虎の鳴き声。跳び起きてみたら、残念でした猫だった。

次の日はまる一日象に乗ってジャングルの散歩。合間を見て舟で川を下り、ワニたちと初対面。

次の日はクルー人の住んでいる家を見学させてもらった。病気の娘さんが気の毒。あー、日本だったらなー。深いため息。

ほとんど毎晩、キャンプファイヤーを囲んでマンゴーククテルを飲みながらネパールダンスに興じて、現地の人と深める楽しい交流の時間。

クルー人奥様の衣装を上から下まで触らせてもらった。照れながら握手をしてくれた。訪れるたびに感じるのだが、排気ガスの匂いが強くなっていることが残念でたまりません。

チャンスがあれば、何回でも行きたい国です。

ネパールでの出会い ●

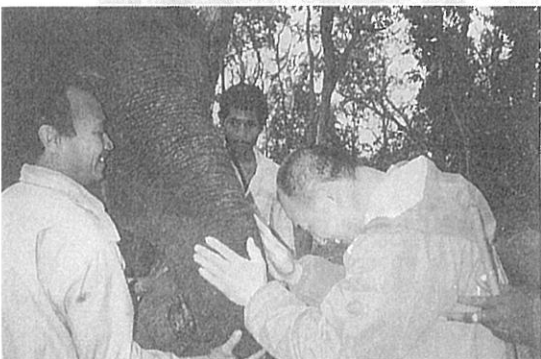
佐藤 弘子

「ネパール」と言えば、「ヒマラヤ山脈の根元の国」、「シャカ生誕の国」、「生き神様・クマリのいる国」ということしか知らなかった私ですが、今回はいろいろと体験できた、まさにstudy tourでした。

カトマンドゥ空港の手摺りに一定の間隔で彫刻された花、インドとの国境体験、トラライ平野に沈む大きな夕日、シマラ空港に下り立った時の穏やかな空気、砂利を踏みしめる靴底から伝わってくる足裏の感触、シャハさんの城から見た大きな月と虫の声、象の背で見たジャングルでの日の出とオオルリに似た鳥の声、電気のない生活、ファイヤーを囲んでの夕食、鼓に似た形の太鼓をたたいたこと、そしてエベレストのマウンテン・フライトなど、数えればきりがありませんが、ここでは、私と出会った恥ずかしがりやの、でもなぜか人懐っこいネパールの人たちについて、思いつくままに紹介いたしましょう。

2月19日午後、停電中のNAWB（ネパール盲人福祉協会）を訪問しました。ペアになっての懇親会、私のお相手は歩行訓練士のUさんでした。ネパールでは、歩行訓練士に指導を受けたフィールドスタッフが盲人家庭を訪問して訓練するのだそうです。2日後、私たちはバラ郡に赴き、盲人家庭を訪問しました。農家の主婦も、井戸から水を汲み家に運ぶ男性も、舗装されていない凸凹道を長い直杖でゆっくりと歩きます。その様子を見ていて、日本だったら車にはねられてしまうのではないかと思ったほどです。でも、“Here is Nepal.”と思い直しました。

Uさんはきめ細かな心遣いの女性で、時の流れを感じないほど楽しい一時でした。彼女は英語がペラペラ。それに比べ、私は単語を羅列するのみ。お互いに通じなくなると、“I’m sorry.”と言っては手を握り合い、笑えばなぜか心がわかるという繰り返しでした。通訳のありがたさを初めて知りました。隣でペアを組んでいたネパール人に日本語で、「あなたと話がしたい」と言われましたのでお互いに自己紹介しました。彼はネパール語を



ル・スタディツアー

たちの熱き交流

教えるピッカピッカの大学の盲人講師Tさんでした。でも時間切れ。“See you again”と言って別れましたが、帰国する前にTさんと再会できたかと思っていました。

2月21日、盲児20名が勉強しているドゥマルワナ高校の寄宿舎を訪問しました。歓迎の歌と踊りを鑑賞。食後、次の訪問地へ行くためバスの発車を待っていると、青い服の一人の男児がバスに乗り込んできました。これを皮切りに次から次へ。後部座席にいた私はその子の手をとり、さらにオレンジ色の服、おさげの長い髪に白い生花をつけた女児の手をとり、席に座らせ、二人に水筒、リュックなどを触らせました。彼らは珍しそうに指でなぞっていました。この盲児は皆、成績優秀、利口そうな子たちです。バスにエンジンがかかり「さあ出発ー」、といっても学校を一回り。うれしそうな歓声。ある子はマイクで歌を唄い出したり…。残された盲児はバスの外で悔しそう。「彼らはバスに乗りたかったのだ」と思うと、いじらしくなりました。

さてネパール最後のdinner partyでは、私からお願いしてUさん、Tさんに再会しました。二人はよく覚えていてくれました。彼女と彼の間に入って楽しい食事をしました。Tさんが日本語と日本の国について知りたいと言うので、皆がダンスをしている間の2時間、いろんな話をしました。彼は英語の音声腕時計、私は触読式の婦人用腕時計を見せあたりもしました。彼が少し日本語を話せるのが私にとってせめてもの救いでした。このときばかりは時が流れてほしくない思いでした。そして彼がカバンの中でなにか探し物をしているようでした。これがクライマックス。点字器セットの登場です。ドイツ製のプラスチック製27行30マスの片面書きのそれは、1マスの点の間隔が広く、とても書きにくいものでした。大きさは、日本製片面書きの12行32マスのプラスチック製懐中定規を縦に二つ並べたような物です。彼の希望どおり50音と私のフルネームを書きました。が、今思うと、ローマ字でも書いてあげればよかったのに「後の祭り」です。用紙は画用紙よりもざらざらした質の悪いもので、点字がすぐにでも消え



てしまいそう。異国の地にて異国の点字機で点字を書く自分がなぜか不思議に思え、うれしくもあり、めったにない好機でもあり、少し恥ずかしくもありました。

その他に、脳梗塞の後遺症と思われるご婦人に「日本だったらリハビリで何とか治りそうなのに…」という心残りもありますが、縁あらばネパールで出会った人たちと、またいつかお会いしたいという思いを抱きながら、限りある紙面なので、finishいたします。

※ネパール・ツアー参加者リスト※

- | | |
|-------------------|--------------------|
| 【1】松葉 恵 (茨城) | 【2】松葉 幸子 (茨城) |
| 【3】米沢 かよ (愛知) | 【4】平川 羊子 (愛知) |
| 【5】佐藤 弘子 (愛知) | 【6】前田 忠男 (福島) |
| 【7】竹田 功 (福島) | 【8】篠原 信子 (愛知) |
| 【9】須原ひとみ (東京) | 【10】川田 孝子 (東京) |
| 【11】菅原 温子 (東京) | 【12】佐々木秀明 (ヘルペス協会) |
| 【13】阿部 誠 (コメンタリー) | |

ネパール・ツアー旅程表

1997年 2月18日(火)	成田10:30発(TG-641)→バンコック15:30着 バンコック:CHAOPHYA PARK HOTEL泊
19日(水)	バンコック10:30発(TG-311)→カトマンズ12:45着 カトマンズN A W B 訪問、視覚障害者と交流。 (HOTEL MALLA泊)
20日(木)	バタン観光、その後空路シマラへ。 ドゥマルワナ統合教育校視察・盲児童と交流。 その後ジープでフィールドワーク(盲人家庭訪問)、 バラC B Rセンター視察。 (HOTEL SAMJHANA泊)
21日(金)	インド国境へ。その後専用バスでチトワン国立公園へ。象のサファリなど。 (TEMPLE TIGER JUNGLE LODGE泊)
22日(土)	チトワン国立公園。象のサファリ、ジャングル・ドライブ、カヌーサファリなど自然探索。 (TEMPLE TIGER JUNGLE LODGE泊)
23日(日)	タルー族の村訪問。その後専用バスでボカラへ。 ボカラ市内観光、ペワ湖畔でキャンプファイヤー。 (SHANGRI LA VILLAGE RESORT泊)
24日(月)	バスでノーダラへ。西ヒマラヤ連峰を展望。 チベット難民村へ。その後空路カトマンズへ。 (HOTEL MALLA泊)
25日(火)	カトマンズ、バクタプール市内観光。 (HOTEL MALLA泊)
26日(水)	カトマンズ13:50発(TG-312)→バンコック18:15着 (HOLIDAY INN CROWN PLAZA泊)
27日(木)	バンコック市内観光。 (HOLIDAY INN CROWN PLAZA泊)
28日(金)	バンコック08:10発(TG-672) 成田着16:00

初めての技術指導

事務局スタッフ 根本 厚志

部屋の入口にさしかかると、なんとなく懐かしいような石油ストーブの灯油の匂いが、調子のあまりよくない私の鼻にもはっきりと感じられた。部屋に入ろうとして靴を脱いでいると、聞こえてきたのは点字製版機のペダルを踏む音とキーをたたく音が交じりあった私には見なくても分かるなじみの音。この音で、ようやく仕事をするんだという実感が起こった。この部屋でNAWBのスタッフが点字教科書の製作をしているのである。そして、わたしは彼らに技術指導をするためにここに來たのだ。

2台ずつの製版機と印刷機がストーブをはさんで向かい合っている。作業していてもお互いの顔が見えるから雑談も自然と起こる。そんなアットホームな雰囲気の仕事場だ。しかし、スタッフに質問を始めると、この部屋にも改善すべき問題が多いことにすぐ気がつく。そして同時に、問題の解決について、彼らがいかに私たちに期待しているかということも。こうした問題の多くが、日本では多少の金を払えば解決できてしまうものであるが、彼らにそれを求めるのは酷だろう。

私はこれまで技術指導の効果については半信半疑だった。今まで技術指導にあたった者共通の思いであっただろうが、日本とは生活習慣・文化の大きく異なるネパールで、果たして日本と同じやり方を強いる必要があるのかという疑念を強く抱いていた。職場環境の改善などといった事は概ね全世界共通であろうが、仕事の効率性を高めるといふことになる国民性の違いが浮き彫りにされる。しかし、そういった疑念は少々私のうがった考えだったようだ。確かに、仕事の効率性といったことまで進歩が見られたとは言いがたいが、こういった技術指導が、少なくともスタッフの成長に一躍買っていることは確かだろう。もちろん指導とは教える側の一方通行といった性格のものではないから、その成否は指導を受ける者のやる気・資質・人間性によるところは大きい。

今回、私が会った一人の製版士はそれを充分に満たしていたと言える。彼は、私が話に聞いている



点字出版所スタッフに技術指導する根本

たネパール人像とは異なり、語弊があるかもしれないが、理知的かつ職業意識のある男で、問題点もしっかり把握していた。彼はNAWBで働き始めてまだ約1年半だが、製版だけでなく印刷・製本・発送まですべてやっている。時間に余裕がある時は書棚の整理をしているという。私は3年間製版しかやってこなかった。当協会が分業制が確立しているといえればそれまでだが……。

彼は目を輝かせて私に言った。「ここで仕事ができ、とても嬉しい。そして（製版から発送まで）全部できることも……」。続けて、「忙しいほうが好きだ。残業システムがあればやりたい。でも、できるだけ短期間で仕事をやるのが大事だ」

彼のような若者が多数ではないのかもしれない。私はもうそれ以上何も言うことはなかった。そこで今回の技術指導は終了としたが、その時も私は彼の言葉を心の中で問い続けていた。

点字教科書製作の課題

NAWB点字出版所では、これまで、点字教科書製作に使う点字用紙の紙折りを、木製の台と竹べらを使い、手で折っていました。製版や印刷は、指導・研修の成果が実って、技術がかなりスムーズに移転し、点字教科書作りも軌道に乗っています。しかし、製本に関しては、かなり高度（職人的）な技術が要求されることに加えて、表紙の材質の問題などもあり、丈夫で体裁の良い本作りが難しい面があります。

最近、ポカラのアマルシン統合教育校で盲教育の指導をしているJOCV（青年海外協力隊）の隊

員から、点字教科書がすぐバラバラになってしまふとか、開きが悪くて盲児が困っているということを知り、今回(5月)の技術指導で現場の製本作業の問題点を探りました。

この結果、表紙の問題は残るものの、それでも納得のできる製本が可能であることがわかりました。製本作業はすべて手作業です。そして手作業には丁寧さが要求されます。スタッフに、表紙や製本に関する若干の勘違いがあり、これが原因でうまくいかなかった部分もありますが、問題は丁寧な作業ができていないことでした。とくに、印刷前の段階の紙折りに問題があり、その後の工程

に大きな影響を与えていました。指導は充分していただいているのですが、これが国民性の違いでしょうか。今回、徹底的にこの点についての指導を試みましたが、成果については次回のネパール行きを待たなければなりません。

昨年NAWBに寄贈した紙折り機は電動ではありませんが、従来の方法に比べたら、品質の面から、作業効率の上からも圧倒的な力を発揮するはず。本機と私たちの指導が実って、盲児が読みやすい丈夫で美しい点字教科書ができることを期待したいものです。

96 チャリティ公演「朗読と音楽でつづる 宮沢賢治の世界」を開催

97年8月24日(土)、宮沢賢治生誕百年当日を間近に控え、当協会主催のチャリティ公演を開催しました。賢治の誕生日8月27日までの1年間は、生誕百年のまさに「賢治ブーム」。出版物はもちろんのこと、演劇、映画、アニメ、各種イベントと引きも切らずに展開され、とくに夏休み期間中は催しのラッシュとなりました。そんな中、当公演では、賢治の紡いだ言葉、そして言葉にはなかった世界に同時に触れる試みを、朗読と音楽というシンプルなかたちで表現。表現者は、ナレーションをはじめとする放送界の大ベテラン・白坂道子、フリーアナウンサー・深沢彩子、邦楽界に新風を吹き込む尺八奏者・土井啓輔、インドネシアの伝統音楽ガムランを演奏するグループと、異色の組み合わせを配しました。

とりわけ、抑えのきいた強靱な白坂の語りと森羅万象の息づかいさながらの土井の演奏のコンビネーションは圧巻。賢治の求めた“ほんたうの”世界へのいざないを果たしました。

会場の東京・武蔵野芸能劇場は立ち見も出るほどの盛況、熱気に満ちていました。お越しくださいました皆さん、ありがとうございました。

なお、本公演は日産化学工業(株)様、東京ガス(株)様にご協賛いただきました。厚く御礼申し上げます。本公演の収益金は、すべてネパールの視覚障害者援護事業に使われています。

97 国際協力フェスティバルに参加

1996年10月5・6日の両日、日比谷公園で開催された「国際協力フェスティバル」に参加。ボランティアの協力を得て、写真展示などをおこない当協会の活動をアピールしました。ボランティアの皆さん、ありがとうございました。



ネパールでのボランティア活動

後続のボランティアがネパールを目指しています。当協会は昨年9月から本年4月まで、9名のボランティアを派遣しました。高校生、大学生、社会人と多彩な顔触れです。本ボランティア活動は、ネパール盲人福祉協会で日本語を教えること、点字教科書製作の作業を手伝うことです。難しい条件は何もありません。自分で計画を立てることができ、自分の責任でネパールに行ける方ならどなたでも参加できます。もちろん自分なりの興味やテーマをひっさげて行くも良し。主体性がものを言う活動です。こうした比較的自由なプログラムが功を奏してか、みなさん、充実した日々を過ごされたようです。とは言え、行くには行ったが1日顔を出しただけという方もいらしたようで、これでは、先方からボランティアとして認めてもらうことはできません。でも、ほとんどの方は、ボランティア活動を通じてネパールの人たちと友人になり、日本ではできない体験をし、日本人が失くしてしまった何かを感じとって帰国されたようです。そして帰国後、今度は他国へ飛んで行く方もいるわけです。初代ボランティアの寺内貴代さん、現在インドネシアでボランティア活動中。前号でご紹介した徳淵千絵子さんは大連外国語学院に留学中です。そして、石井正子さんも、私たちに原稿を送った翌日フィリピンへ旅立たれました。

ボランティアのみなさん、ありがとうございました。ご活躍お祈りいたします。

ダンニャバード・ネパール

田中 靖子

私は、1997年3月16日から4月2日まで、日本のTHKAとネパールのNAWBのボランティアとして、初めてネパールへ行ってきた。このボランティアに参加したのは、ある雑誌で「日本語講師ボランティア募集」と掲載されていたのを見つけたからであった。私は大学で日本語を専攻し日本語教育に興味があり、実際の現場を見たいと思ってボランティアを希望した。特にネパール好きというわけではなく、むしろネパールについては何も知らなかった。しかし、無知ゆえにかえってネパールのことを好きになれたのだと、今は思う。「知らぬが仏」とは、まさに私のことである。

さて、「日本語講師ボランティア」ということであったが、実際はNAWBでの点字出版の手伝いが私たちボランティアの主たる仕事であった。その作業を行いつつ、日本語に興味のあるスタッフ数名におしゃべり形式で日本語を使ったり、日本の雑誌を見せたり、流行の歌を歌ってみたりした。ホームナット氏については、彼の希望もあって、終業後午後5時から6時まで個人授業をおこなった。

出発前に、「あまり気張らず楽しんでください。」といわれたとうり、NAWBに毎日行か



NAWBスタッフと

なければならぬということもなかったし、個人の自主性に任されたボランティアだった。そういう意味で、私は思う存分ネパールを堪能できた。実際、私は3週間弱の間ずっとカトマンズ盆地にいた。ポカラにもチトワンにも行かなかった。けれども普通の観光では味わえないことばかりで、毎日本当に楽しく充実していた。それは、ネパール人、日本人含め本当に多くの人々との出会いがあったからだと思う。「予定は未定」の白紙状態だった私の手帳は、書き込むことができないほどびっしり埋まり、分刻みの忙しい日々となった。あっという間に3週間がすぎてしまっ、このままずっとネパールで暮らしたい!と思うほど、ネパールの大ファンになってしまった。

いま私は、週に1度日本ネパール協会でネパール語を学んでいる。またネパールへ行き、もっともっとネパールと、そこに住む人々のことを知りたいと思ったからである。このボランティアを通じて本当にたくさんの人と出会うことができた。これからもずっと交流を続けていきたいと思う。こんなに素晴らしい経験の機会を与えて下さったTHKAとNAWBの皆さんに心から感謝している。ありがとうございました。ダンニャバード！

豊かな国・ネパールでの滞在を終えて

石井 正子

初めてネパールに足を踏み入れた時、とても懐かしい感覚を覚える自分に我ながら不思議だった。街の様子は想像していたのとはほとんど差がなかったのに比べ、ネパール盲人福祉協会のスタッフの皆さんは、想像以上にいい人たちばかりで本当に良くしていただいた。いま振り返ると、長かったような、短かったような3カ月間だったが、本当にいろいろな体験をし、日本にいたら決して考えたり感じたりしないことを、ネパールの人たちに気づかせてもらうことができた。日本人がもっていない心、忘れてしまった心をもっているネパール人がとてもいとおしく思えた。日本人も昔はこんなに心がきれいだったのだろうか、こんなに純粋だったのだろうかと考えると、ネパールの人たちが日本に憧れ、日本を目指そうとしている姿に疑問が残った。

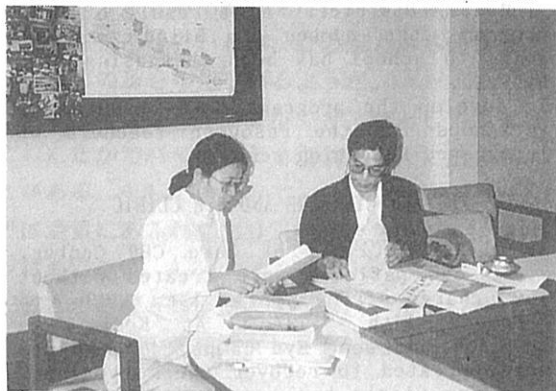
日本語教師ボランティアと点字教科書製作のお手伝いということでのネパール滞在だったが、実際は体調を崩したり、旅行に出たりといった私個人の事情により、ほとんどまともな授業は持てなかった。勉強意欲のあった生徒の皆さんには大変申し訳なかったと思う。逆に、私のほうがスタッフのかたにネパール語を教えてもらい喜んでいった感じだった。そんな数少ない授業のなかでのひとつひとつが、改めて気づかされるといったことばかりだった。教えるどころか教えられることばかりで、迷惑をかけたことも多々あったと思うが、それでも気を使ってくださったスタッフのかたがたには、本当に感謝してもしきれないくらいである。また、こんな貴重な体験をさせてもらえるチャンスを与えてくださった東京ヘレン・

ケラー協会の佐々木さん、阿南さんをはじめとする皆様に深く感謝いたします。ありがとうございました。

今度はフィリピンのマニラにある大学で、日本語を教えることになっている。10カ月という長い期間ではあるが、ネパールでの体験を無駄にすることのないように、自分なりに頑張ってみようと思う。今度はもう少し成長した姿で、東京ヘレン・ケラー協会やネパール盲人福祉協会のスタッフの皆様とお会いできるように願いつつ・・・

ボカラで活躍する阿由葉さん

この5月に、どこから見ても”ネパール人”という日本人にカトマンズで再会しました。JOCV（青年海外協力隊）の隊員として、昨年ボカラのアマルシン統合教育校で盲児の指導に当たっている阿由葉綾子さんです。東京在任時は、久我山盲学校の先生でした。当校は、1982年に政府主導で開設された統合教育校です。寄宿舎やスタッフも充実しており、視覚障害児教育校の中では大変恵まれた環境にあります。しかし、今回、彼女から、教師たちに意欲が見られないこと。盲児は勉強さえしていればよいという風潮で、甘やかしが過ぎること。盲児もこうした風潮に慣れ過ぎていて、などなどの問題が語られました。恵まれ過ぎる環境は、教育の本質を見失う一面をもっているのかも知れません。厳しい教育環境にある農村地域の統合教育校では、教育に対する初心が貫かれています。私は阿由葉さんに、バラ郡ドゥマルワナ校の見学をすすめました。



阿由葉さんと懇談する事務局スタッフ

AID PROJECT IN NEPAL FISCAL 1996

(1/4/1996 - 31/3/1997)

BARA CBR PROJECT

Almost 8 years have passed since Bara CBR (Community-Based Rehabilitation) Project started in Bara District in Narayani Zone.

Bara CBR center provided 150 newly identified BVI (Blind and Visually Impaired) persons with counseling, mobility and daily living skill training. Bara CBR center conducted follow-up program for 376 BVI persons who have already received the training. Regarding 145 BVI persons who have already been self-reliant by getting income-generating loan, Bara CBR center gave them vocational training and daily living guidance. Bara CBR Project is supposed to finish in a year. However, the constant effort of Bara CBR staff has made Bara CBR center take root in Bara District and have the firm support of local people.

BRAILLE BOOK PRODUCTION

NAWB Braille Printing House produced 2,101 braille textbooks for school education from 1st grade to 10th grade. Then 1,316 textbooks were distributed to 440 Blind children at 26 Integrated Education schools including 1 blind school.

INTEGRATED EDUCATION PROGRAM

There are about 30,000 blind children aged between 6 and 15 in Nepal. At present there are about 340 blind children who are given opportunities to go to school.

We extended and conducted Integrated Education Program for blind students to 4 schools (26 students) in Bara District. Also, we conducted same program to each school in Rautahat (12 students), Rupandhi (15 students) and Gorkha (15 students) District. As a result of this program, the number of blind children going to school has been increasing year by year.

To develop the program, NAWB conducted 2 workshops for the resource teachers of Integrated Education schools.

PRIMARY EYE CARE AND EYE CLINIC

At the Eye Clinic of Bara CBR Center, 7,217 eye patients were treated without any charge from April 1st, 1996 to February 11th, 1997. At Kedia Eye Hospital and some Eye Camps, 17 patients were operated to recover their eyesight. Bara Eye Clinic has been contributing to

prevention of eye disease for the local people who had hardly received the treatment because there was not any eye hospital near their houses.

To develop the prevention of eye disease, Bara CBR Center conducted Primary Eye Care Workshop twice for the local people. And

the center distributed 14,208 capsules of Vitamin A to 3,727 children. It also conducted itinerant lecturing for 1,063 students and local people to spread the knowledge of nutrition and hygiene focusing on taking Vitamin A.

DONATION OF PAPER-FOLDING MACHINE

At NAWB Braille Printing House, braille papers had been folded by hand. To raise the work efficiency and its' qualitative level, a Paper-Folding Machine was introduced to the Braille Printing House.

STUDY TOUR

The aim of study tour is to inspect the current welfare of the BVI persons in foreign countries and get together with them. THKA conducted Nepal Study Tour from February 18th to 28th, 1997. This time, the tour group went to see not only NAWB but also Bara CBR Center and some Integrated education school in Bara District. The tour attained excellent results, sharing a good time with BVI persons and blind children.

PUBLIC RELATIONS, EVENT, AND
FUND-RAISING CAMPAIGN

The charity performance "Kenji Miyazawa world produced with narration and music" was held under the direction of THKA as public relations and fund-raising campaign. (August 24th, 1996)

We participated in International Cooperation Festival at Hibiya Park. We held a photographic show and distributed our newsletters "LIGHT OF LOVE" as public relations. (from October 4th to 6th, 1996). Also, we participated in Nepal NGO Festival (July 14th, 1996) and showed our activities using photos and slides in some public places.

INTRODUCTION OF VOLUNTEERS TO NAWB

We sent 8 volunteers to NAWB. They gave Japanese lessons to NAWB staff and helped NAWB with the braille book production.

1996年度事業報告（1996年4月1日～1997年3月31日）

1. 視覚障害者リハビリテーション(CBR)事業

ナラヤニ県バラ郡においてCBR事業を継続実施した。本事業は本年6月で開始8年を経過する。新たに発見された視覚障害者150名に対し、更生相談、歩行・日常生活技能訓練を実施した。また、すでに訓練を終了した視覚障害者376名に対してはフォローアップを行い、自活資金貸し付けによって自立した視覚障害者145名に対しては、職業訓練や生活指導などのサービスを提供した。本CBRは終了まであと1年を残すのみとなったが、過去8年の実績により、確実にバラ郡に定着し地域住民の熱い支持を受けている。1

2. ネパールにおける点字出版事業

初等～中等教育(第1～10学年)課程の点字教科書2,101冊を製作し、ネパール全土の統合教育校26校(盲学校1校を含む)440名の盲児童(盲学校1校を含む)に1,316冊配布した。また、点字カレンダー400部を作成し、統合教育校や関連施設に配布した。

3. 統合教育事業

①バラ郡の統合教育校4校(盲児童26名)にて、引き続き統合教育プログラムを実施した。また、ロータート(盲児童12名)、ルバンディヒ(盲児童15名)、ゴルカ(盲児童15名)各郡の拠点統合教育校においても同様のプログラムを実施した。本統合教育事業により盲児童の就学は年々増加している。

②英語点字の略字の習得を目的に、「全国統合教育講習会」を開催した。参加者は全国の統合教育担当教師18名。(1997年2月5日～11日)

③バラCBRセンターにおいてバラ郡統合教育講習会を開催した。(1996年5月26日～28日)

4. 眼科診療と失明予防

①バラCBRセンター眼科診療所において、バラ郡の眼疾患者7,217名に対し無料診療を行った。(1996年4月1日～1997年2月11日) また、アイ・キャンプや眼科病院において17名の患者の開眼手術を行った。当診療所は、眼科病院が無く放置状態にあった地域住民の失明予防に大きく貢献している。

②CBRセンターにおいて、地域住民を対象に「失明防止講習会」を2回開催した。

③3,727名の児童に対し14,208カプセルのビタミンA剤を配布した。

④学校や村落を巡回し、1,063名の児童・住民に検診や講習を通して、ビタミンA摂取の重要性を中心に、栄養知識や公衆衛生知識の普及を図った。

5. 技術指導と事業管理

点字出版局の協力を得て、NAWB点字出版所の技術指導を実施した。また事務局スタッフを派遣し事業管理を行った。

①1996年5月28日～6月9日

事務局スタッフ2名(事業管理)

出版局スタッフ1名(技術指導)

②1996年10月27日～11月9日

事務局スタッフ2名(事業管理)

③1997年2月18日～2月28日

事務局スタッフ1名(事業管理)

出版局スタッフ1名(技術指導)

6. 印刷用紙折機の送付

ネパール盲人福祉協会点字出版所では、これまで点字用紙の紙折りを手作業によって行っていたが、作業効率と質的レベルを上げるため印刷用紙折機を導入した。本機は、国内の点字図書館で不要になったもので、これを譲り受け(財)海事国際協力センターの助成によって輸送した。

7. スタディ・ツアーの実施

本ツアーは異文化に触れながら、他国の視覚障害者福祉の現状視察と交流を図ることが目的である。97年2月18日～28日の日程で「ナマステの旅～ネパール・スタディツアー」を実施。今回はネパール盲人福祉協会のみならず、バラ郡まで赴きCBRや統合教育の実際を見聞。農村地域で生活する視覚障害者や盲児たちとの交流によって大きな成果を上げることができた。

8. 広報・イベント・募金活動

①96年7月「愛の光通信」第11号を発行して広報・募金活動を行った。

②96年7月14日、世田谷区の日本学園において開催された「ネパールNGOフェスティバル」に参加。写真パネルによって広報活動を行った。

③96年8月24日、広報・募金活動の一環として、チャリティ公演「朗読と音楽でつづる宮沢賢治の世界」を主催した。

④96年10月3日、新宿郵便局において「NGO活動報告会」に参加。写真パネル展示を行った。

⑤96年10月4日～6日、日比谷公園で開催された「国際協力フェスティバル」に参加。ボランティアの協力を得て、写真展や「愛の光通信」の配布による広報活動を行った。

⑥97年1月10日、渋谷郵便局において、スライドによる活動報告を行った。

⑦97年2月7日～21日、新宿北郵便局の展示スペースにおいて、活動写真展を行った。

9. 海外協力ボランティアの派遣

日本語講師および点字出版作業のボランティアとして、8名をネパール盲人福祉協会に派遣した。

1996年度収支計算書

自 平成8年4月1日
至 平成9年3月31日

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
事 務 費	3,033,138	寄 付 金 収 入	12,389,193
賃 金	490,000	協 賛 金 収 入	509,500
旅 費	146,224	助 成 金 収 入	6,730,670
消 耗 品 費	415,939	募 金 収 入	5,149,023
印 刷 製 本 費	262,650		
役 務 費	643,589	事 業 収 入	97,000
会 議 費	17,000	販 売 収 入	97,000
雑 費	1,057,736		
事 業 費	10,375,394	繰 入 金 収 入	1,000,000
海 外 出 張 費	1,724,064	本 部 会 計 繰 入 金 収 入	1,000,000
海 外 援 助 費	8,641,776		
雑 費	9,554		
雑 支 出	10,744	雑 収 入	980,093
諸 税 公 課	10,744	雑 収 入	980,093
小 計	13,419,276		
当 期 繰 越 金	1,047,010		
合 計	14,466,286	合 計	14,466,286

貸借対照表

平成9年3月31日現在

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
流 動 資 産	9,189,531	流 動 負 債	10,744
現 金	3,444	未 払 金	10,744
預 金	9,186,087	繰 越 金	9,178,787
		前 期 繰 越 金	8,131,777
		当 期 繰 越 金	1,047,010
資 産 合 計	9,189,531	純 財 産 合 計	9,189,531

海外援護事業記録

(1996 / 6 - 1997 / 5)

96年 5月 *技術指導・事業管理：佐々木、阿南、森田
(5/28-6/9)

6月 *国際ボランティア貯金配分金決定 (6/17)

7月 *日本学園で開催された「ネパールNGOフェスティバル」に参加。(7/14)

*「愛の光通信 No.11」発行

8月 *(財)海事国際協力センターの輸送費助成を受けて印刷用紙折機をNAWBに空輸。(8/13)

*武蔵野芸能劇場においてチャリティ公演「朗読と音楽でつづる宮沢賢治の世界」を開催。
(8/24)

10月 *新宿郵便局で開催された「NGO活動報告会」に参加。(10/3)

*日比谷公園で開催された「国際協力フェスティバル」に参加。(10/5-6)

*郵政省調査団、NAWBを視察。(10/21)

*事業管理：佐々木、阿南 (10/27-11/9)

11月 *JICA「障害者の国際協力事業への参加」調査団、NAWBを視察。(11/6)

97年 1月 *渋谷郵便局において活動報告 (1/10)

2月 *技術指導・事業管理：阿南、根本 (2/18-28)

*ネパール・スタディツアー (2/18-28)

*新宿北郵便局でネパール活動写真展を開催。
(2/7-21)

5月 *技術指導・事業管理：佐々木、根本
(5/18-6/1)

96. 9.16 ラジオ短波第一 - チャリティ公演放送
97.1月号「ノーマライゼーション」に活動紹介

寄付者ご芳名 (五十音順・敬称略) 1996年4月1日 - 1997年6月30日

藤井 泉・悦子様ご夫妻より191万9千円、西山 トシ様より100万円の
ご寄付を賜りました。心より厚くお礼申し上げます。

(個人)

青木 貞子	青木 ヒサ	浅倉 久志	浅野 孝一	阿部 淳	荒木 國夫
在田 一則	有本 成子	安藤 生	イクバル・ハニフ	池田 義明	池田 富夫
石井 元一郎	石井 桃子	石川 はな	石川 尚代	池田 隆雄	池田 幸栄
石光 貞子	市角 誠	市田 克彦	市原 政春	出田 敦子	出光 永
伊藤 啓子	伊藤 正男	今泉 新治	井村 恵津子	植竹 清孝	上野 伊津子
上村 香代子	上村 健次	鶴飼 信子	内田 和子	内山 武志	大内 三良
大河原 正子	太田 義秋	大竹 英雄	大西 章夫	大橋 東洋彦	大橋 義雄
岡野 マスミ	岡山 美恵子	尾形 仿/雅子	小川 美奈	小川 喜道	オギノ 芳信
小河 静	尾関 育三	小野 日央	小野塚 耕吉	折戸 正明	賀川 友吉
加来 典子	片桐 武昭	片山 文彦	勝又 誠子	菊井 寿子	加藤 晃
金森 なを	金田 一郎	香山 千加子	河田 満	桂田 明子	木塚 泰弘
汲田 冬峯	鞍谷 清孝	栗田 美代	栗本 久夫/悌子	神山 貞子	肥塚 美和子
肥塚 隆	児玉 里江	小林 一弘	小林 淳子	小森 愛子	近藤 文郷
紺野 敏雄	後藤 良一	三枝 礼子	坂入 操	佐藤 利村	佐藤 久夫
佐橋 忠明	塩月 弥栄子	下沢 仁/幸子	白井 雅人	末吉 恵里	菅原 温子
杉野 義次	竹村 実	田中 さ加恵	田中 茂	田中 紀子	田中 亮治
田辺 建雄	谷内 正史	千田 耕基	堤 四郎	照井 博	当山 啓
鳥羽田 節	鳥山 由子	中川 みどり	中島 啓幸	長島 好夫	永野 耐造
中村 保信	中村 太郎	中村 ユリ	西方 義保	西條 一止	西本 行男
野田 寛	橋本 時代	八柳 京子	林 鳳紘声	林 大	原田 美男
桧山 寿子	檜山 美代子	福原 ササノ	藤本 和美	星野 彰	堀川 博司
牧 茂美	政本 ゆたか	増田 守男	松尾 宏之	松岡 義人/朋子	松谷 まき子
松田 千恵子	松橋 佳子	松本 滋	三浦 綾子	水野 まち子	三平 勇
御本 小一郎	宮崎 勇	宮原 満洲男	目黒 千代子	森 典子	両角 征吾
安平 聖弘	薮内 清	山崎 邦夫	山田 二郎	山田 あき子	山辻 英也
山根 昭市	山内 潤子	山本 俊雄	山本 美穂子	吉田 旬	米田 昌徳
ラマ 栄理香	若林 弘子	渡辺 直明	和出野 充洪		

(団体)

エアメールサービス
近畿日本ツーリスト(株)
小林動物病院
高垣商店
(株)テクニランド
日産化学工業(株)
(株)ファーストエンジニアリング
横浜アリーナ舞台事務所

オーディオ・プロセッシング・テクノロジー
国際協力フェスティバル募金箱
(株)コム・ツアーセンター
高松キワニスクラブ
東京ガス(株)お客様センター
(株)バップ
福島県視力障害者協力会
ラインゴールド募金箱

(有)大本印刷
国立身体障害者リハビリテーションセンター学友会
ソニー(株)ブロードキャストカンパニー
(有)ディーアンドエムミュージック
東和インターナショナル(株)
ヒビノ(株)
宮古南静岡視覚障害者会

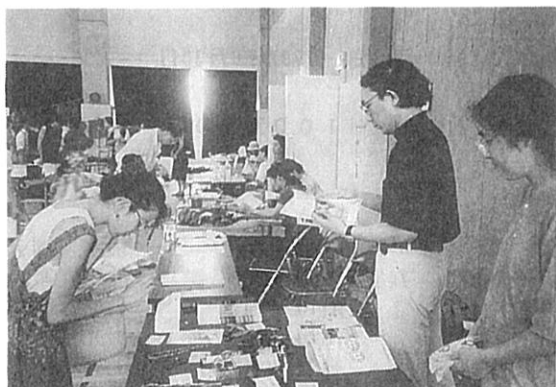
(物品寄付) 石川 純子 斎藤 利重 渋谷外語学院 永井 実太郎 巻田 麻椰 山田 太郎

(お詫び) ご寄付を賜りながら、前号で次のかたがたのお名前が掲載されませんでした。

ここに明記してお詫び申し上げます。

石川尚代様 桜井文男様 鈴木宏泰様 関根喜寿様 三平勇様

温かいご支援ありがとうございました



ネパールNGOフェスティバルでの広報活動
ボランティアの皆さんありがとうございました



ネパール・スタディツアー
チトワン国立公園で

東京ヘレン・ケラー協会
オリジナルテレフォンカード
頒価 2,000円 (2枚セット)



ヘレン・ケラー女史のポートレートと、ヒマラヤを背景に日本の盲人がトレッキングを楽しんでいる様子をデザインした、オリジナルテレフォンカード2枚組。とりわけ女史の自筆サイン入りの写真は貴重です。本テレフォンカードの純益は、すべてネパールの盲人援護に使われます。

募金のお願い

ネパールにおける失明防止と視覚障害者援護をさらに充実するために、募金をお願い致します。
寄付金のご送金は、下記口座をご利用下さい。

郵便振替：00150-5-91688
銀行口座：さくら銀行新宿支店(普)5101190

寄付金に対する減免税措置

東京ヘレン・ケラー協会は、所得税法施行令第217条第1項第5号および、法人税法施行令第77条第1項第5号にかかげる社会福祉法人でありますので、当協会に対するご寄付は、所得税法第78条第2項第3号、法人税法第37条第3項第3号の規定が適用され、税法上の特典が受けられます。

編集後記

6月に、猛暑のネパール・タライ平野から帰国し、日本は涼しいなどとほざいてたのも束の間、タライを思わせる日本の夏、真っ盛りの中の編集作業でした。

8年にわたるバラCBRも今年が仕上げの年。今やバラ郡でCBRや眼科診療所を知らない人はいないくらいです。また、統合教育校で学ぶ盲児たちにも、周囲から温かい目が向けられています。現地にしっかり根づいた視覚障害者福祉になりました。この灯を絶やさないためにも頑張らなければなりません。こうした長期プログラムが組めるのも、皆様のご支援があればこそです。心より感謝申し上げます。

今後とも変わらぬご支援・ご協力をよろしく
お願い申し上げます。(佐々木)



**TOKYO HELEN KELLER
ASSOCIATION**

Established 1950

14-4, Ohkubo 3-chome, Shinjuku-ku, Tokyo 169, Japan

発行：社会福祉法人 東京ヘレン・ケラー協会
海外盲人援護事業事務局

住所：〒169 東京都新宿区大久保3-14-4
TEL: 03-3200-1310 FAX: 03-3200-2582
E-mail: XLY06755@niftyserve.or.jp